

## 第7章

# 俵ヶ浦半島の歴史と文化財



たわらがうらはんとう いま  
俵ヶ浦半島の位置

### この地域の小中学校

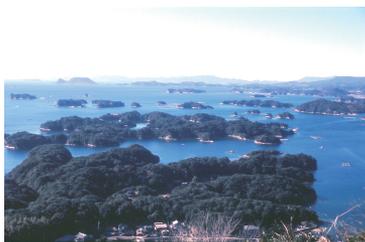
小学校: 赤崎小学校、船越小学校、庵浦小学校、俵浦小学校

中学校: 愛宕中学校

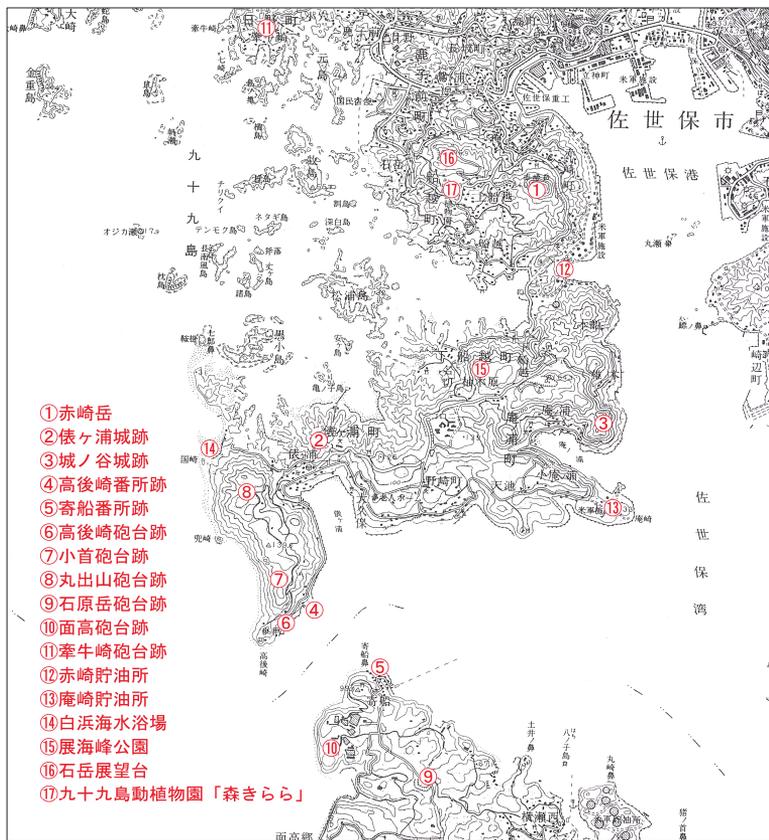
たわらがうらはんとう れきし ぶん かざい  
**第7章 俵ヶ浦半島の歴史と文化財**

くじゅうくししま  
**九十九島のビューポイント**

俵ヶ浦半島は佐世保市の南に突き出た半島で、この半島と向かい側の西彼杵半島が防波堤の役割を果たしているため、佐世保港は天然の良港となっています。半島は九十九島を包み込むような形になっているため、半島のあちこちからその美しい姿を見ることができます。特に、展海峰からの眺めは素晴らしく、たくさんの人が訪れる観光名所となっています。



展海峰からの眺め



たわらがうらはんとう ちまづ  
**俵ヶ浦半島の地図**

## 半島の歴史

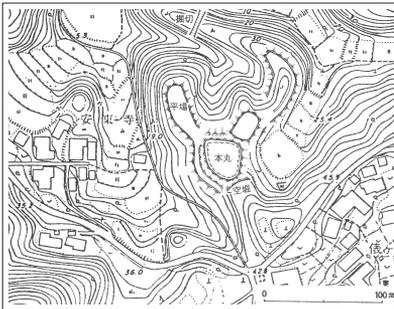
俵ヶ浦半島の歴史は古く、約20,000年前の旧石器時代にはすでに人が住んでいたようです。しかし、それ以後のことは詳しくは分かっていません。わずかに半島の付け根にある赤崎岳(標高240メートル)に、675年(白鳳4)に今の亀山八幡神社(八幡町)の元となる神社が建てられたという伝説があるくらいです。

戦国時代になると俵ヶ浦半島にも戦国武将が現れ、あちこちに城を築いたといわれています。

俵ヶ浦半島を本拠地としていた戦国武将として、有名な人物が「赤崎伊予守」です。この人は、平戸松浦氏の家来として、戦国時代末期には佐世保の南半分を治めていました。この赤崎伊予守は「蛇島」の昔ばなしに登場し、海賊退治に活躍したという伝説があることから、かなりの勢力をもった人物だったと思われる。赤崎伊予守は、赤崎岳に城を構えていたといわれていますが、その城跡はまだ見つかっていません。



赤崎岳



俵ヶ浦城縄張り図

現在、俵ヶ浦半島で確認されている城跡は、庵ノ浦町にある城ノ谷城と、俵ヶ浦町にある俵ヶ浦城跡しかありません。

しかし、これらの城については、資料が全く残されておらず、いつ、誰が築いたのか分かっていません。ただ、海を望む場所に築かれていることから、松浦党のように、海を舞台に活躍した武士が築いた城かもしれない。

1 平安時代の終わり頃から、長崎県北部から佐賀県唐津地方にいた武士団の総称。

### 昔ばなし～赤崎伊予の海賊退治と赤崎弁天～

戦国時代、佐世保の近海には海賊が出没して、人々を苦しめていました。赤崎に館を構えていた赤崎伊予は、この様子を見かねて海賊退治に乗り出しました。

ある夜、伊予は家来たちに命じて、ひそかに赤崎浦の入り口の浅瀬にたくさんの大岩を投げ入れさせました。さらに、「大潮の晩は赤崎が手薄になる」という噂を流しました。

次の大潮の晩、罫が仕掛けられているとは夢にも思わない海賊たちは赤崎に押し寄せ、手当たり次第に荒らしまわりました。そのうちに潮が引き始め、浦の入り口に沈めた岩が頭を見せはじめました。このときを待っていた伊予は太鼓をたたかせました。と、それを合図に鐘が鳴り、ホラ貝が鳴り、どこに潜んでいたのか、無数の兵が喚声をあげて海賊たちに襲いかかったのです。

不意を衝かれ大混乱に陥った海賊たちはあわてて船に飛び乗り逃げ始めましたが、次々と岩に乗り上げて身動きが取れなくなってしまいました。「さては謀られたか！」気づいたときにはすでに遅く、押し寄せた伊予の軍勢に一人残らず討ち取られてしまいました。

海賊退治からしばらく経ったころ、今度は奇妙なうわさがながれるようになりました。海賊たちが全滅した例の浅瀬の上に青白い火の玉が浮かび、近づくと髪を振り乱した生首が飛び出してくる、というのです。化粧物を目撃して寝込む者が増えるにつれ、さすがに赤崎伊予も気になり始めました。と、いうのも、生首の主に心当たりがあったからです。

先の海賊退治のとき、海賊船に一人の山伏が乗っていたのです。山伏は、弁天様を勧進して旅をしているうちに海賊に捕まってしまった、と必死に訴えたのですが、聞き入れられず、伊予の家来に殺されてしまったのです。死にゆく山伏の恨みの表情を思い出した伊予は、赤崎城の良(北東)の方向に小さな弁天様を祀り、山伏の霊を慰めたのです。

## 番所ができる

江戸時代、平戸藩は日本唯一の貿易港だった長崎の警備を担当していました。また、藩内には多くの離島があり、海の守りを固めることは、幕府や藩にとって重要なことでした。そこで、幕府の命令で平戸藩は藩内のあちこちに遠見番所を築きました。俵ヶ浦半島の突端にも、1714年(正徳4)に高後崎番所が置かれました。高後崎番所は、対岸にある大村藩の寄船番所と共同して、外国船や密貿易への警戒を行なっていました。



高後崎番所の船溜り

藩内の遠見番所は、外国船の来航が多くなるにつれて備えが強化され、1808年(文化5)に起こった<sup>2</sup>フェートン号事件以後は高後崎番所でも鉄砲を備え、狼煙台を築くなど警戒態勢を強めました。

2 イギリスの軍艦フェートン号がオランダ船を追って長崎港に侵入、燃料や水、食料を強奪した事件。

## コラム～地名の由来～

全ての人に名前があるように、全ての土地にも名前がついている。この「地名」はその土地の成り立ちや地形、歴史、伝説を表すことが多く、その地域の歴史を知る上で重要な要素となる。俵ヶ浦半島では次の二つの地名の由来が良く知られている。

「赤崎」… 675年(白鳳4)、宇佐八幡宮の分霊を前岳(赤崎岳)に祀ったところ、山が光を放ったので「あかり崎」と呼ぶようになり、それが「赤崎」となったという。

「船越」… 船越湾と佐世保湾に挟まれた陸地は狭く、昔は最短距離で100メートルほどだったという。このような地形を「地峡」と呼び、明治初年まで舟を担いで越えたという。そのため、船が陸を越える場所、「船越」となったという。

要塞地帯として

1886年(明治19)に佐世保港が軍港に指定されると、鎮守府をはじめとする多くの軍事施設が建設されました。それと同時に、軍港を守るために陸軍による要塞建設が始められました。要塞は「佐世保要塞」と名付けられ1901年(明治34)までに7か所の砲台が完成しました。

佐世保港の入口にあたる俵ヶ浦半島は特に重要視され、高後崎、小首、丸出山の3砲台が築かれていました。対岸の面高砲台も含めると、大小併せて26門もの大砲が海を睨んでいたのです。これらの砲台の射程は互いに重なるように配置され、敵艦がどこを通っても射撃できるようになっていました。

佐世保要塞は、1904年(明治37)に起こった日露戦争で戦闘配置につきましたが、戦闘に参加することはありませんでした。その後、佐世保要塞は重要性が薄れ、廃止された砲台もありましたが訓練は盛んに行なわれ、皇太子時代の天正天皇が訓練をご覧になったこともあったそうです。



訓練中の砲台(椋山演習砲台:東大久保町)

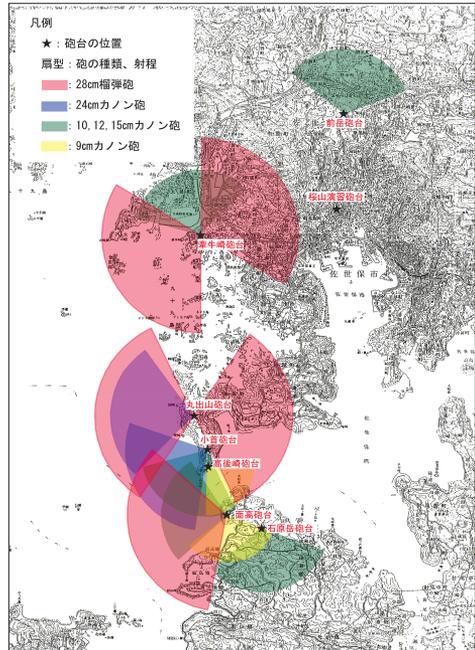
本田三郎編『ふるさとの思い出写真集 佐世保』より転載



丸出山砲台の観測所



小首砲台の弾薬庫



佐世保要塞の砲台配置図と射程

明治時代の砲台は、レンガや切石、コンクリートをバランスよく用いた丁寧な造りで、道には玉砂利まで敷かれていました。この時代の砲台は実用性だけではなく、デザイン的な面も重視していたことに特徴があります。また大変頑丈に造られていたため保存状態が良く、建設後100年経った現在でも、昔のままの姿で山の中に眠っています。

重油タンクの建設と技術者・真島健三郎

軍港建設の一環で、赤崎岳下から船越の川ノ谷にかけては、石炭や重油の貯蔵基地として整備が進められました。特に1912年(明治45)には、川ノ谷に佐世保で初めて重油タンクが造られました。これは日本初の鉄筋コンクリートの重油タンクでした。そして大正時代になると、さらに多くの重油タンクが川ノ谷に造られました。いずれも鉄筋コンクリート造で空から分かり難いように地下に造られました。これも日本初の試みでした。



川ノ谷の重油タンク(大正7年完成)



真島健三郎

これらの工事を担当したのは、真島健三郎(1873~1941)という海軍の技術者でした。彼は、鉄筋コンクリートの研究に心血を注ぎ、時には工事現場の砂利の上で睡眠をとることもあったそうです。そのような苦労もあって、鉄筋コンクリートを使って様々な建物を造ることに成功しました。

現代の建物の多くは鉄筋コンクリートを使っていますが、その基礎を築いたのは真島健三郎といっても過言ではありません。

コラム～地名の由来②～

俵ヶ浦半島の突端の岬を「こうござき」と呼び、「高後崎」と「向後崎」の二通りの漢字を当てる。正しくは「高後崎」であり、地図にもそう記されている。

それでは、「向後崎」はどこからきたのか？

この「向後崎」は明治時代になってから海軍が使い始めた当て字で、軍艦が佐世保を出港し、外海に出る直前に後ろを振り向いて名残を惜しんだことから名付けられたという。海軍の街ならではの地名といえるだろう。この章では正しいほうの「高後崎」に統一した。



船から見た高後崎(左側)

## 俵ヶ浦の戦後

戦争が終わっても俵ヶ浦半島は相変わらず重要視され、1950年(昭和25)に始まった朝鮮戦争(第1章佐世保市街地参照)の時には、高後崎と対岸の寄船の間にアメリカ軍が防潜網を張り、自衛隊ができてからは、高後崎警備所が置かれて警戒を続けました。しかし、人工衛星などが発達した今日では警備所は必要なくなり、1990年(平成2)に廃止されました。

このように、江戸時代から現代に至るまでの俵ヶ浦半島の歴史は、まさに「海の守りの歴史」だったのです。



佐世保湾口に張られた防潜網  
※中本昭夫著『佐世保港の戦後史』より転載

### 3 潜水艦の侵入を防ぐためのフェンス。

## 観光名所・俵ヶ浦



石岳から見た夕日

戦争が終わるまで、俵ヶ浦半島は要塞地帯という秘密のベールに隠されていたため、九十九島の美しい景色を市民は見ることができませんでした。

戦争が終わり、九十九島の美しい景色が晴れて市民のものとなると、当時の佐世保市長中田正輔氏は、九十九島、平戸、五島列島を含む地域を国立公園とする構想を打ち出します。中田市長と周辺市町村、そして地域住民一丸となった運動が実を結び、1955年(昭和30)に18番目の国立公園として「西海国立公園」が誕生しました。

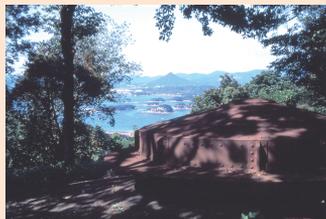
佐世保市でも、九十九島を一望できる俵ヶ浦半島の石岳(標高196.9メートル)に展望台を、さらに佐世保市並熱帯動植物園(現在の九十九島動植物園「森きらら」)を建設しました。また、戦時中に閉鎖された白浜海水浴場も再開するなど、九十九島を活かした観光開発を進め、1986年(昭和61)に整備された展海峰は、九十九島の絶景と、春は菜の花、秋はコスモスが楽しめる名所として、市内でも最も人気のある公園となっています。



白浜海水浴場

## コラム～要塞が守ったもの～

佐世保要塞は軍港などの軍事施設を守るために造られた。要塞の機密保持のために「要塞地帯法」という法律が整備され、要塞周辺では、家屋建設はもちろんのこと、漁業さえ厳しく制限された。そのため、要塞に近かった九十九島沿岸ではほとんど開発が進まず、手付かずの自然が残り、戦後間もなく国立公園に指定されることとなった。軍港を守るために造られた佐世保要塞は、結果的に九十九島の美しい風景をも守ったのである。



観測所越しに見た九十九島

## 地域の年表

時代	出来事
旧石器時代	俵ヶ浦半島各地に人が住みはじめる。
飛鳥時代	
675年(白鳳4)	宇佐八幡宮の分霊を赤崎岳に祀る。(伝)
鎌倉時代	
1264年(文永元)	八幡宮を赤崎岳より現在地へ移す。(伝)
戦国時代	
1572年頃	赤崎伊予守が佐世保を領有、居城を佐世保申通に移す。
江戸時代	
1714年(正徳4)	高後崎番所ができる。
近代	
1878年(明治11)	佐世保小学校庵浦分校開校。
1898年(明治31)	高後崎砲台完成。
1901年(明治34)	丸出山砲台完成
1912年(明治45)	川ノ谷に日本で初めて鉄筋コンクリートの重油タンクができる。
1927年(昭和2)	九十九島が新日本百景海岸の部で1位となる。
現代	
1949年(昭和24)	九十九島が県立公園となる。
1955年(昭和30)	西海国立公園誕生。
1959年(昭和34)	石岳展望台完成。
1961年(昭和36)	佐世保市亜熱帯動植物園開園。
1964年(昭和39)	白浜海水浴場開場。
1986年(昭和61)	展海峰公園整備完了。
1990年(平成2)	高後崎警備所廃止。